



嬉泉の新聞 第92号 2025年(令和7年)7月発行
 発行=社会福祉法人嬉泉
 東京都世田谷区船橋 1-30-9 (〒156-0055) TEL 03-3426-2323
<https://www.kisenfukushi.com> E-mail: kisen@kisenfukushi.com

支援者としての「存在」のありようへの気づきと調整、回復 ～ 支援者支援がめざすこと ～

社会福祉法人嬉泉 評議員・日本社会事業大学名誉教授
 藤岡 孝志

共感という日本語に、Compassionという英語をあてることがある。この言葉は、仏教での「慈悲」という言葉との間で相互に訳されてもいる。思いやりを持って関わり、つらさ・きつさを共有することでもある。ここでの「関わり」と「共有する」ということで生じる支援者の傷つきや疲れに対して、支援者支援の領域では、「共感疲労」(Compassion Fatigue)と呼んでいる。疲労は起こりうるものであり、だからこそ、その疲労への対処が重要となる。

また、バーンアウトという状況に至るまでも、共感疲労の兆候が表れてくる。筆者は、そのことを「炭鉱のカナリア」に例えている。支援の場で起きてくる様々なリスクやきつさ、そしてその先にあるかもしれないバーンアウト・リスクに、いち早く気付いてくれるのがカナリア(共感疲労の兆候)である。共感疲労の提唱者フィグリー氏によれば、共感疲労は、利用児者と一緒につらさ・きつさを体験あるいは再体験している時に生じる緊張と不安、無力感、混乱、そして支援からの孤立の感覚である。この兆候は、日常的に生じている可能性がある。特に、疲労が重なると、支援からの孤立の感覚を生じやすいことが強調されており、心理的に安心・安全を感じることができる場の確保と「支援者を支援する支援者」の存在が大事になる。

支援者支援は、支援者の側から臨床現場をとらえなおし、支援者の状態を整えることこそが、クライアントセンターであるとの考えに立脚している。相手あってこそその支援者支援であり、支援者が抱える様々な課題は、常に利用児者のWell-beingを中核に据えて解決されていくことが求められる。

長年、嬉泉の様々な施設に臨床動作法を中心に関わらせていただいていた。そこで感じるのは、セッションを重ねていく中で、利用児者と職員の方

々々、あるいは、利用児者と家族の方々がとても良い表情になり、とても穏やかな時間が過ごせるようになるということである。日頃の職員の方々の関わりが、動作法のセッションに、集約的に表現されていると感じている。

支援者支援の要点は、方法と存在のバランスであり、支援者の「存在」のありようへの気づきと調整、そして、つらさ・きつさからの回復のために、セルフケア、グループケア、組織的ケアを総動員して、職員一人ひとりの「存在」を支援していくことであると考えている。「支援方法」の開発、精緻化もとても大事であるが、それを臨床の場で実現する職員一人ひとりの「存在」が、利用児者の方々の「存在」と相互交流する「ライブ感」こそが、臨床の真骨頂・醍醐味であり、創造的な側面であろう。その「ライブ感の質」を保持するためにも、支援者支援は、臨床現場では必須である。心理劇臨床での「生きている時間をみんなと一緒に過ごす」ワクワクするライブ感と同様である。

筆者は、今、施設・機関の支援者支援を推進するために、各現場に、「支援者支援コーディネーター」という役割をもつ支援者支援を学んだ専門家を、兼務・専従、常勤・非常勤に関わりなく、配置することを提唱している。その動きはかすかながらも広がり始めており、職員定着支援のモデル事業として児童相談所や児童養護施設等で始まってきている。障害児者施設においても、ぜひその機運が高まり、支援者支援コーディネーターが配置されていくことを心から願っている。

参考文献

藤岡孝志 2020 支援者支援養育論

／ミネルヴァ書房

2024年度社会福祉法人嬉泉事業報告

1. 法人全体

(1) 経営状況

2025年4月1日現在、当法人の事業所数は25であり、職員数は常勤336名、非常勤140名の計476名である。社会福祉法人として外部監査を導入するために監査法人と契約を締結し、経営の透明性を担保するとともにコンプライアンス遵守に努めている。修繕や設備投資が増加しているため、各事業において長期的な見通しが求められる状況にある。物価高騰の影響により光熱水費や給食食材費が増加し、それが繰越残高および施設整備のための積立に影響を及ぼしている。

(2) 人事制度

「人事制度見直し検討プロジェクト」が終了し、「キャリア育成型」とも言うべき新たな人事制度を構築したものである。これにより、職員のキャリア育成に重点を置いた制度が導入された。職員のエンゲージメントの变化等については、今後モニタリング調査を通じて確認していく必要がある。

(3) 採用関係

少子高齢化による人材難が続いて

いる状況において、オンラインコンテンツの充実により一定の成果を挙げたものである。

新卒採用においては内定者交流会などの施策を実施し、その結果、辞退率が前年度より低下した。さらに、常勤雇用者の離職率が前年より改善し、新卒者の早期離職率も業界平均を下回る水準であることが確認されている。今後も採用力の向上と職場環境の改善に注力する方針である。

(4) 人材育成

不適切な支援の問題は、援助理念や思想、援助方法の継承が十分に行われていないことに起因するものである。そのため、研修やスーパービジョンを制度化し、職員のエンパワメントを促進するための研修体系の整理を進めている状況である。ただし、この研修体系は現在も未完成の段階にあり、さらに整備が必要である。

(5) 利用者支援

国の「強度行動障害支援者養成研修」は氷山モデルを理論的背景としており、アセスメントに基づく環境調整を行うことで、自閉症者への「標準的支援」と位置づけられている。

しかし、この支援は利用者の内面（感覚や気持ち）を扱わないため、行動障害の真意に辿り着けないことが多い。「標準的支援」で切り捨てられている部分にこそ支援の本質があると考えられ、受容的交流はその部分を補完しうる可能性を有する。受容的交流の価値を明確化することが重要であり、その価値を情報発信やコンサルテーションを通じて同業他社等へ提供することが求められる。ただし、現状では職員自身がその価値を十分に共有しておらず、さらなる取り組みが必要である。

(5) 苦情解決実績

・苦情申出件数 0件

(6) 第三者評価受審事業所

- ・袖ヶ浦のびろ学園
- ・袖ヶ浦ひかりの学園
- ・すこやか園
- ・宇奈根なごやか園
- ・鎌田のびやか園
- ・清瀬市子どもの発達支援・交流センター
- ・大田区立こども発達センター

わかばの家

2. 各事業拠点報告

(1) 本部拠点事業

本部拠点事業は、東京都発達障害者支援センターこどもTOSCAと

相談支援事業所で構成した。

東京都発達障害者支援センターこどもTOSCAは、東京都における発達障害児支援の中核的機関として、相談対応および地域支援に取り組んできた。また、「QIASCSS」の活用支援やペアレントメンターの育成・派遣事業、広域支援人材の配置、運営委員会の設置等にも積極的に関与した。相談支援事業所においては、法人内外の利用者に対するサービステル等利用計画の作成およびモニタリングを行い、生活拠点の移行支援を強化した。関係機関との連携を図ることで、新規受け入れ休止の状況下においても、事業運営の安定を維持している。

(2) 子どもの生活研究所

子どもの生活研究所は拠点を「おらか学園」「めばえ学園」「こぐま学園」「すこやか園」として再編した。法人本部との合同運営会を通じて協力体制を構築してきたが、組織変更および制度改定の影響により、事業所間の交流は限定的であった。複合施設としての特性を生かし、療育・保育・相談の各領域において、社会福祉法人嬉泉の理念である「受容的交流理論」の継承および発展に力を注いでいる。

また、新型コロナウイルス感染症の影響により中断されていた交流行事の再開が課題となっている。今後は事業所間における実質的な交流および連携を強化し、職員育成と支援の質的向上を図ることを目指す。

施設整備面では、NAS（ネットワーク接続ストレージ）の集約および駐車場の新設等を実施した。老朽化および経年劣化に対する対応については、優先順位や予算を考慮の上、計画的に進める必要がある。さらに、災害対策および虐待防止に関する委員会を年間4回開催し、研修や訓練を全事業所合同で実施している。

(3) 嬉泉の保育

嬉泉の保育は、保育事業と共に地域における子育て支援施設として何ができるかを考え、各園が情報共有しながら必要な取り組みを進めた。地域の子育て支援施設としての機能強化に努め、保育所体験会の実施および放課後児童クラブ開設に向けた準備を進めた。

第三者評価および巡回指導、検査を通じて運営状況の点検を実施した結果、東京都によるサービス推進費監査において不備が指摘され、改善に向けた指導を受けた。運営体制においては、毎月の運営会議開催によ

り迅速な意思決定を実現した。また、主任会の定例化および情報共有ツール「サイボウズ」の活用により、業務上の具体的改善を推進した。

職員育成に関しては、法人理念の理解促進を図る援助テーマの説明に加え、新人フォローアップ研修や交流研修を通じて継続的な人材育成に取り組んだ。また、保育士の離職率改善や職員の働きやすい環境づくりを目指し、各園間の連携を強化するとともに、長期的視点に立った事業運営を推進し、職員の成長を支援した。

(4) 嬉泉福祉交流センター袖ヶ浦

嬉泉福祉交流センター袖ヶ浦は、昨年度に発生した不適切支援への対応を契機として、法人理念および行動規範に対する職員の理解が深まり、不適切支援の再発防止に取り組んだ。本年度においても、継続的な研修と人材育成の場を設け、利用者本位の支援の推進に努めている。

重度利用者に対する支援においては、的確かつ迅速な対応が求められるが、その根幹には人権擁護および虐待防止に対する高い意識が不可欠であると認識している。

また、職員同士の交流を通じた相互理解と気づきの共有により、研修

の場がより効果的に機能している。児童部と成人部における間接業務の合同運営には一定の有効性が見られた一方で、事業規模の拡大により課題の可視性が低下し、現場との乖離が生じつつある。そのため、運営体制の見直しが必要とされている。さらに、入所施設における療育支援の在り方を再検討し、生活支援の質的向上を目指した新たな体制構築が今後の課題である。

(5) 板橋区立赤塚福祉園

板橋区立赤塚福祉園は、生活介護事業および緊急保護事業においては、全体的に利用率が低下する傾向が見られた。そのような状況下においても、指定管理者独自事業として延長サービスおよび園内宿泊（防災宿泊）を継続的に実施し、利用者の多様なニーズに対応してきた。

また、自主生産品統一ブランド「ATB」に関しては、オンラインの活用を進め、販路の拡大および認知度の向上に取り組んだ。短期入所事業においては、新たに送迎サービスを開始し、利便性向上を図るとともに、利用促進を目指した。

さらに、板橋区民生委員（行政書士）を外部委員として招聘し、権利擁護および虐待防止に関する体制強化を

図った。

区立福祉園の民営化に関しては、2026年度からの5年間についても引き続き、指定管理者制度による運営を継続することが決定されている。

(6) 清瀬市子どもの発達支援・交流センター

清瀬市子どもの発達支援・交流センターは、心身の発達に遅れや偏りのある子どもに対し、地域との連携を通じて相談および訓練指導を行い、成長を支援するとともに、地域社会における育ちを支える「受容的交流」を基本理念として展開している。

本年度は、特別支援教室の利用を目的とした相談件数が多く、心理士および言語聴覚士が専門的に関与した。多角的なアセスメントを基盤としつつ、保護者への説明および社会資源活用に関する支援を強化した。職員の専門性向上を目的に、陪席時間の確保および月2回のケース会議を実施したほか、保護者アンケートを活用し、療育内容の充実を図った。

また、ペアレントグループの開催を通じて、保護者間の孤立感を軽減し、親子にとってストレスの少ない日常の過ごし方を共有する場を提供した。必要に応じて、個別に保護者面

談も随時実施している。さらに、小集団療育を通じた個別支援計画の連動を意識し、保育園等との連携日を設定することで、子どもの理解促進および新たな強みの発見に向けた協働を進めた。

(7) 大田区立こども発達センター

わかばの家

大田区立こども発達センターわかばの家は、大田区の方針に基づき、法人の掲げるミッション「共生社会の実現」の達成を目指し、乳幼児への支援ならびに保護者・地域との連携を積極的に推進した。「児童発達支援ガイドライン」に則り、地域インクルージョンの実現を目標に掲げ、関係者との協働作業を通じて、わかばの家のあるべき姿を検討した。

また、「ふれあいはすぬま分室」から「西蒲田分室」への移設を契機とし、少人数による運営体制の効率化を図るべく検討を行った。児童発達支援事業においては、基準を満たしつつも、継続的に改善点を洗い出し、サービスの質的向上に取り組んでいる。

施設環境整備の面では、老朽化した照明器具のLED化およびエレベーターの改修工事を完了し、引き続き大田区と連携しながら適切な対応を進めていく予定である。

2024年度社会福祉法人嬉泉決算報告

貸借対照表

社会福祉法人 嬉泉
2025年3月31日現在

資産の部				負債の部			
	当年度末	前年度末	増減		当年度末	前年度末	増減
流動資産	1,118,997,907	1,120,854,656	△1,856,749	流動負債	426,541,741	279,951,763	146,589,978
固定資産	2,132,545,860	2,135,760,306	△3,214,446	固定負債	255,830,176	272,116,684	△16,286,508
基本財産	1,646,759,721	1,717,766,024	△71,006,303				
その他の固定資産	485,786,139	417,994,282	67,791,857	負債の部合計	682,371,917	552,068,447	130,303,470
				純資産の部			
				基本金	1,111,718,279	1,111,718,279	0
				国庫補助金等特別積立金	335,327,843	363,343,673	△28,015,830
				その他の積立金	221,000,000	146,000,000	75,000,000
				次期繰越活動増減差額	901,125,728	1,083,484,563	△182,358,835
				(うち当期活動増減差額)	△107,358,835	136,276,355	△243,635,190
				純資産の部合計	2,569,171,850	2,704,546,515	△135,374,665
資産の部合計	3,251,543,767	3,256,614,962	△5,071,195	負債及び純資産の部合計	3,251,543,767	3,256,614,962	△5,071,195

資金収支計算書

社会福祉法人 嬉泉

(自) 2024年4月1日 (至) 2025年3月31日

勘定科目	予算 (A)	決算 (B)	差異 (B)-(A)
事業活動による収支			
事業活動収入計 (1)	3,247,761,938	3,271,561,548	23,799,610
事業活動支出計 (2)	3,150,601,882	3,047,678,761	△ 102,923,121
事業活動資金収支差額 (3)=(1)-(2)	97,160,056	223,882,787	126,722,731
施設整備等による収支			
施設整備等収入計 (4)	1,300,000	1,315,000	15,000
施設整備等支出計 (5)	43,799,450	42,969,873	△ 829,577
施設整備等資金収支差額 (6)=(4)-(5)	△ 42,499,450	△ 41,654,873	844,577
その他の活動による収支			
その他の活動収入計 (7)	52,845,832	19,435,549	△ 33,410,283
その他の活動支出計 (8)	198,816,008	165,136,725	△ 33,679,283
その他の活動資金収支差額 (9)=(7)-(8)	△ 145,970,176	△ 145,701,176	269,000
予備費支出 (10)	6,980,000	—	△ 6,980,000
当期資金収支差額合計 (11)=(3)+(6)+(9)-(10)	△ 98,289,570	36,526,738	134,816,308
前期末支払資金残高 (12)	872,856,497	872,856,497	
当期末支払資金残高 (11)+(12)	774,566,927	909,383,235	134,816,308

事業活動計算書

社会福祉法人 嬉泉

(自) 2024年4月1日 (至) 2025年3月31日

勘定科目	当年度決算 (A)	前年度決算 (B)	増減 (A)-(B)
サービス活動増減の部			
サービス活動収益計 (1)	3,246,587,459	3,102,150,224	144,437,235
サービス活動費用計 (2)	3,291,346,249	2,892,922,710	398,423,539
サービス活動増減差額 (3)=(1)-(2)	△ 44,758,790	209,227,514	△ 253,986,304
サービス活動外増減の部			
サービス活動外収益計 (4)	24,974,089	1,552,076	23,422,013
サービス活動外費用計 (5)	14,157,160	2,052,050	12,105,110
サービス活動外増減差額 (6)=(4)-(5)	10,816,929	△ 499,974	11,316,903
経常増減差額 (7)=(3)+(6)	△ 33,941,861	208,727,540	△ 242,669,401
特別増減の部			
特別収益計 (8)	167,527,711	1,600,000	165,927,711
特別費用計 (9)	240,944,685	74,051,185	166,893,500
特別増減差額 (10)=(8)-(9)	△ 73,416,974	△ 72,451,185	△ 965,789
当期活動増減差額 (11)=(7)+(10)	△ 107,358,835	136,276,355	△ 243,635,190
繰越活動増減差額の部			
前期繰越活動増減差額 (12)	1,083,484,563	962,208,208	121,276,355
当期末繰越活動増減差額 (13)=(11)+(12)	976,125,728	1,098,484,563	△ 122,358,835
基本金取崩額 (14)	0	0	0
その他の積立金取崩額 (15)	0	0	0
その他の積立金積立額 (16)	75,000,000	15,000,000	60,000,000
次期繰越活動増減差額 (17)=(13)+(14)+(15)-(16)	901,125,728	1,083,484,563	△ 182,358,835

アートニエ・アウトスト

HERALBONY LABORATORY
GINZA (ヘラルボニーラボラ
トリーギンザ) を訪問しました

嬉泉の新聞 第89号にて、アトリエ・アウトストと株式会社ヘラルボニーとの関わりについて紹介しました。ヘラルボニーの活動を通して、三井アウトレットパーク木更津の新エリア工事の仮囲い装飾や、日本航空（JAL）機内食の装飾デザインなどに採用され、アトリエ・アウトストの作品が世の中に出る機会が多くなってきました。

今回、ヘラルボニーが、東京で初の常設店を2025年3月にオープンしたことを機に、ヘラルボニーのアトリエ・アウトストを担当して頂いている嵯峨山恵美様に話を聞く機会をいただいたので、東京・銀座にある『HERALBONY LABORATORY GINZA』にお伺いしました。

『HERALBONY LABORATORY GINZA』は、正面から向かって右側が商品を扱うストア、左側がアートギャラリーとなっており、色鮮やかな色彩や、独特の模様のようなデザインの商品と、それらをモチーフにした素敵な商品が展示されていました。



「この度は忙しい中、時間を取っていただきありがとうございます。東京、フランス・パリに子会社を設立ともすごい勢いを感じますが、この先どういった展開をしていくのでしょうか。」

嵯峨山氏… 現在、海外含めて施設や作家との契約を進めています。日本から海外への販売ルートの開拓や、日系企業の海外支社や、反対に、外資系企業に声をかけながら広げていく活動をしています。この先、海外の作品を日本で見ることできたり、アウトストを含めた日本の作品が海外で見られるような機会を分け隔てなく作っていきたいなと思っています。

「嵯峨山さんは実際に袖ヶ浦に来園していただいて、かなり長い時間をかけて実際に作品を見ていただいています。嵯峨山さんが感じているアトリエ・アウトストの印象や魅力などお聞かせください。」

嵯峨山氏… アウトスト担当職員の戸屋さんにお話を伺った中で、特に印象に残っているのは、絵を一枚一枚見ながら、その当時の作家さんの状態や、やりとりを、日記の様に話している姿を見て、本当に素敵だな、と思いました。単純に作品だけ見るよりも、そこに作家さんと戸屋さんとの関

係性という背景も含めて、今まで一緒に積み上げてきた歴史があるんだな、と感じました。



【ヘラルボニー 嵯峨山氏】

「アウトストとしても、その歴史というかストーリーを含めての一枚の作品として残したいなと思っています。そして今回、秋山住江さんの『逆立ちしてるシマウマ』がヘラルボニーの携帯ケースに採用されたということは、アウトストとしても初めてのことでとてもうれしく思っています。」

嵯峨山氏… 次の機会にヘラルボニーのアート担当と一緒にアトリエ・アウトストに伺って実際に作品を見させていただけたいと思います。とてもうれしいです。本日はお忙しい中ありがとうございます。

三井アウトレットパーク木更津
で、アウトスを探せ！

6月23日に『三井アウトレットパーク木更津』の新エリアがオープンしました。

新エリアの工事期間中、仮囲いのデザインに、秋山住江さんの『逆立ちしてるシマウマ』と、浜ノ園武生さんの『川岸の町』が採用されておりました。この度、新エリアを含むアウトレット内の自動販売機、コインロッカー、トイレ内の装飾にも採用されましたので、探しにいらして来ました。

写真を載せておきますので、三井アウトレットパーク木更津へ行った際には、ぜひ、アウトスの作品を探していただけるとありがたいです。

【自動販売機】



【コインロッカー】



【館内装飾】



【アウトス作品同士のコラボも】



最後に、ヘラルボニーを通してアトリエ・アウトスにお声をかけていただいた三井不動産株式会社 商業施設・スポーツ・エンターテインメント本部 リージョナル事業部 事業推進グループ主事 佐藤由佳様よりコメントをいただきましたので、紹介させていただきます。

「この度は幣プロジェクトにご協力いただきまして誠にありがとうございました。アトリエ・アウトスの作品で、館内に彩りが添えられ、とても晴れやかで楽しい空間ができました。ぜひ楽しみにいらしていただければと思います。」

(アトリエ・アウトス担当
すこやか園 園長 稲垣 修)

秋山住江さんの「逆立ちしてるシマウマ」をデザインしたスマートフォンケースがヘラルボニー(<https://heralbonny.com/>)の公式オンラインストアで販売中です。



販売価格は、5980円/税込です。左記のQRコードから販売ページにぜひアクセスください。



パンフレットのリニューアルについて

理事長 石井 啓

本年度より、法人嬉泉を紹介するパンフレットをリニューアルしました。その名も「CORPORATE PROFILE」として、嬉泉のことを知っていただくための小冊子にしたのですが、これまでの法人パンフレットとかなり様変わりすることになりました。ここでは、新しいパンフレットが従来のものとどのように変わったかと、それが如何なる考えの基に行われたかを記したいと思います。

変わった点は、次の三点です。

- 一、大きさ(版型)
- 二、厚み(ページ数)
- 三、内容

まず大きさですが、従来はA4版だったものが今回はその半分のA5版になりました。これは、後で触れる内容の変更に関わりますが、手に取って読み易い版型を考えた結果です。

次にページ数が大幅に増えました。従来は4ページだったものが3倍の12ページと文字通り冊子になりました。これも内容に関係した変更で、それだけのボリュームが必要になった

のです。

そしてその内容がどう変わったかですが、従来のパンフレットは、嬉泉の行っている事業をカタログ的に一覧で紹介することを中心に、簡単な沿革と法人事業アウトスの概要説明が掲載されていました。それに対して新しいパンフレットは、嬉泉の理念的な背景としての歴史を単なる沿革として外形的に記載するのではなく、人が紡ぐヒストリーを物語のように書いた「読み物」としました。従来のものも、これはこれで見学の方に説明する際の資料としては役に立っていたので、今後は事業一覽を記載した一枚のチラシに形を変えて残し、新しいパンフレットとの使い分けをしていく予定です。

さてここからは何故このようなリニューアルをしたかということをご説明します。その理由は、嬉泉の法人ブランディング戦略の一環として行う必要があったということです。ブランディングとは何かを説明する紙面の余裕はないので、ここでは簡略に「法人の存在価値を形にして内外に示すこと」だとしておきます。つまり、嬉泉の存在価値を形にしたものの一つがこの新しいパンフレットだということです。

私たちは、前回取り組んだ理念再構築プロジェクトで、嬉泉のコア・バリューは「受容的交流による援助実践そのものである」という結論を得ました。そのコア・バリューを形にして示すことがブランディング戦略として必要な訳ですが、それは非常に難しい。援助実践はそもそも形がないものですから、それを構成する要素として支援をする「人」の語る活動の軌跡を物語のように読めるものにしてみました。それは創始者・石井哲夫の思いから始まって、その没後に志を受け継ごうとしている今の私たち職員全員の物語です。ご一読いただければ幸いです。



嬉泉ホームページのトップページバナー「法人パンフレットはコチラ!」をクリックすると、内容をご覧になることができます。

2026年卒積極採用中!



福祉を学んだ人もこれからの人も

ChallengeできるKISEN

KISENとつながる

オンライン就活セミナー開催中!

マイナビ2026 RE就活.キャンパス

個別就活セミナーも受付中!

または法人HPからエントリー
エントリーはこちらから



◆KISENの日常やイベント情報は公式インスタグラムをチェック!

◆養成校からのご紹介もお待ちしております!